様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３３０１６５

研究課題名（和文）近世東北日本の世帯とライフコース：二本松地域と村山地域の比較から

研究課題名（英文）Household and Life Course in Early Modern Northeastern Japan: Comparison of Nihonmatsu and Murayama Regions

研究代表者
黒須　里美（Kurosu, Satomi）

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：２０２２５２９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は近世から近代移行期の東北に着目し、町場と農村、二本松地方と村山地方という二つの比較軸をもって庶民の人口学的行動を実証的に分析することが目的である。宗門・人別改帳(1678-1870年）から作成されたデータを統合し、長期多世代パネルデータの構築を図った。同じ東北内にあっても、18世紀の人口減少地域と増加地域があり、それは人口流入や出生力レベルの違いによってもたらされていた。さら二本松在郷町と農村を中心とした死亡、移動、結婚のイベントヒストリー分析では、集計レベルや記述統計でみられた町場と農村の差異に潜む、人口学的イベントと直系家族システムのつながりという共通性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　This study compares demographic and family patterns in two regions of northeastern Japan---Nihonmatsu (present Fukushima prefecture) and Murayama (present Yamagata prefecture). With the use of population registers, we constructed multi-generational panel data that span over 200 years between 1678-1870. We found significant differences in the population trends between and within the regions. Those areas with ever-increasing trends were due mainly to higher levels of fertility and in-migration. Event history analysis further revealed that beyond the difference in aggregate levels of mortality, migration, and marriage, that were found between a town and agricultural villages, there were amazing similarities in the determinants of these demographic events that were often shaped by the logic of the stem family system.

研究分野：社会学

キーワード：歴史人口学　家族　世帯　宗門人別改帳　イベントヒストリー分析　東北

１．研究開始当初の背景

近代以前の日本には大きな地域差があったとされる。歴史人口学において、マクロ統計史料からは 18 世紀の人口停滞期を形成した人口減少傾向の東北、人口停滞の関東・関西、そして人口増加を続ける西南地域が示されていた。またミクロ統計史料からも東北日本は早婚と低い出生率、高い三世代同居率、結婚前と後に行われる奉公に特徴付けられ、一方、中央から西日本にかけては、男女ともに結婚前の期間を奉公人として過ごすために比較的晩婚であるが、出生率は東北よりも高めであり、多世代同居の特徴はみられないとされた。このような人口・家族パターンは、従来の農村社会学や家族社会学における「東北日本型」と「西南日本型」という日本文化社会を考察する上での一つの有力な視点を、実証的に裏付ける。しかし、同時に、宗門・人別改帳などのミクロ史料を利用した実証的研究は、類型論にとらわれない、より詳細な分析の必要性を示唆している。

そこで、本研究は東北地域を対象とし、良質な人口史料を利用することで、農村間、そして宿場町と農村との対比を考慮した実証的比較分析を目指すこととした。また、これまでの歴史人口学における「東北研究」が太平洋側地域に偏っていたことを考慮し、日本海側の農村との比較も含めて試みることとした。

２．研究の目的

本研究は、これまで「東北日本型」としてとらえられ、研究されてきた地域に着目し、現在の福島県と山形県の人別改帳や宗門人別改帳を利用したデータベースを構築し、人口学的手法を取り入れることによって、東北地域内における庶民 (農民と町民) の世帯とライフコースを体系的に比較分析していくことが目的である。これまでの研究で利用してきた二本松藩(福島県)の人口史料とともに、同じように長期的に継続する山形藩(山形県)村山郡の山家村と山口村の人口史料を利用する。村山地方は、奥羽山脈東のやませをはじめとする劣悪な気象条件はなく、紅花を中心とした商品作物の市場の発達も含め、環境・経済ともに二本松地方と同じ東北地域としてひとくくりにできない。

本研究は (a) 町場と周辺農村の比較、(b) 太平洋側と日本海側の農村という二つの比較軸を持ち、二本松地域と村山地域に残存する良質な人口史料を利用して庶民のライフコース分析を行い、直系家族システムにおける世帯と個人の人口学的行動とのつながりを明らかにする。

３．研究の方法

麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト室を研究拠点として、具体的には以下の 4 点を中心に進めた。第 1 に、福島県、山形県各史料の整理と入力（デジタル化）を進め、史料としての共通点と相違点を明らかにしつつ、分析をめざした各村のデータベースを構築した。第 2 に、地方文書などの質的情報から、各町村の社会・経済・文化的特徴を探ることをめざした。第 3 に、共通の人口学的指標(死亡率、出生率、平均結婚年齢など)を算出し、社会経済学的指標(世帯の持高など)との関係を探った。第 4 に、データベース化の進んだ村については、個人、 家族・世帯、地域という多層的枠組みでイベント・ヒストリー分析を中心とした多変量解析を実施した。これらの 4 段階をとおして、二本松地方と村山地方の農村間、二本松地方の在郷町と周辺農村という 2 つの比較軸のもとに、人口・家族パターンの共通性と相違性を探った。

４．研究成果

（1）史料整理とデータ構築作業：

まず、これまで研究代表者と連携研究者が個々に利用してきたデータを確認し、東北地方の研究のために利用可能なデータを整理した。二本松地方については、安積・安達郡の 7 町村、村山地方については、村山郡の 4 か村の史料・データが活用可能であることが判明した。

＜陸奥国安積・安達郡（現在福島県）人別改帳＞

1. 下守屋村 1716-1869 年（145 年）50,197 人年
2. 仁井田村 1720-1870 年（146 年）68,682 人年
3. 日出山村 1708-1871 年（125 年）38,661 人年
4. 笹原村 1708-1871 年（125 年）2,389 人年
5. 南杉田村 1678-1870 年（150 年）40,021 人年
6. 郡山上町 1729-1870 年（121 年）202,726 人年
7. 郡山下町 1782-1870 年（95 年）39,600 人年

＜羽前国村山郡（現在山形県）宗門人別改帳＞

8. 山家村 1730-1871 年（89 年）49,197 人年
9. 上山口村 1751-1855 年（25 年）8,936 人年
10. 中山口村 1674-1868 年（81 年）34,118 人年
11. 下山口村 1751-1868 年（43 年）15,354 人年

これらの史料は主に研究代表者と連携研究者がかかわってきた「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究(創成的基礎研究費）を中心に収集整理と入力が進められ、現在は麗澤大学人口家族史研究プロジェクト(代表黒須里美)において整理・管理されている。体系的な比較分析を行うために 3 つのアプローチをとった。

第 1 に史料が解読されたデータから南杉田村の入力、下守屋・仁井田村の土地貸借史料の入力、山家村の追加入力作業とデータクリーニングを中心に行った。本科研事業で新たに南杉田村の史料のデジタル化を完了したことは意義がある。これまでの二本松地方の研究の中心となっていた下守屋・仁井田村と同様、詳細にわたる移動や土地の貸借情報が活用できるだけでなく、1678 年からの変化が追える貴重な史料である。

第 2 に、5, 9, 10, 11 のデータベース化と、

クリーニング、そして共通変数の構築を図った。これらはその他の町村と違い、史料の文言(地文）がそのまま入力されているため、イベント摘出のために数段階の処理が必要であることが判明し、このステップを半自動化することが課題として残った。

第 3 に 1，2，3，4，6，7，8 のデータを Stata を利用して一つにまとめ、データの整合性チェックや分析変数の構築などを含め、比較分析のための効率的な方法を探った。これには海外の研究協力者 Dong Hao 氏の協力を得た。さらにこのうちの 1 と 2 を利用し、日本のデータの信頼性や可能性を東アジアの歴史人口学データベースと比較することで(Hao et al. 2015)、これまでなかった多世代を追うという発想を得ることができ、親族ネットワークの構築を含めた新たな分析の視点を見出すことができた。

1~11 はどれも長期にわたる史料であるが、欠年が多いために実際に利用できる年数や情報にはかなり差がある。入力済みのものも含めてデータ整合性のチェックのために、また分析時に判明するエラー修正のために、時にはオリジナル史料に戻っての確認も必要となる根気のいる作業である。このような作業に予定以上に時間がかかったため、今回は 3，4，9，11 はデータ整理と一部の分析にとどめ、その他の町村を比較分析に利用することとした。

（2）質的史料からみた地域差

地理的な環境と集落の状況などを理解するために、本研究ではじめて取り組む村山地域（天童市・山形市周辺）の資料館・社寺を中心にフィールドワークを行った。紅花を中心とした村山地域（山家・山口村）の経済発展や労働体系は、米への依存度が高く冷害や飢饉の影響を受けやすかった二本松農村（特に下守屋・仁井田村）とは大きく違うことが明らかとなった。

また二本松内においても在郷町と村との比較を進めた。連携研究者の髙橋は、二本松藩の町場と農村との比較において、町並絵図などを参考に人々の住まいのあり方と仕事について調べた。町場郡山においては、基本的に街道沿いに両側町として住居は街道から奥に向かって広がるが、町場の発展につれて裏店も広がった。借家も存在したので、町の外からの流入者を受け入れることも可能であり、このような流入者が町場の人口増加に寄与した。下守屋村は山裾に広がる集村であった。町場と異なり借家などは存在しないが、田畑を耕す人が少なくなった場合には、「主無き土地」として藩では他地域からの移住が奨励されることはあった。近世は原則として兵農分離、農村では農業を行うことが原則であったたが、藩の財政立て直しのために農村において養蚕を行うことは奨励された。ただ、下守屋村は明治期の畑作割合等から確認するに、養蚕がそれほど進められたとは言えない。町場においては商業を中心にさまざまな職業に従事する者がおり、労働需要の多さは他地域から人口をひきつける作用を有したと考えられる。これらの質的情報を分析時の変数構築と結果の解釈に利用した。

また、赤子養育制度などの仕法は、現代社会の政策とも類似するもので人口減少および出生率低下の時期にはかなり藩の為政者によって勧められたことが明らかになった。もっともその効果については統計的な有意さは確認されていない。これらの質的情報を、データを利用した出生・死亡確率分析によって検証していくことは今後の課題である。

（3）人口学的指標の構築と比較

個々の村々については先行研究があるものの、同指標、同モデルを利用することで、二本松地方と村山地方、村と在郷町という比較分析のアプローチが可能となる。そこで、人口推移、死亡率、出生率、自然増加率、世帯数・規模の推移などの基礎的な人口・世帯指標の算出を施した。さらに、変数構築の進んでいる町村においては、移動率（流入・流出）や社会増加率も含め、平常時・飢饉時の変化も追った。ここでは特に比較の視点から、(a)長期的な人口推移、(b)世帯規模の推移について示す。

(a)長期的な人口推移

日本全体の人口変動からみると、東北地方は 18 世紀の人口減少という特徴が際立っている。二本松藩全体の人口推移を見ると、天明、天保の飢饉で人口は急減する。しかし、この全体的な特徴は、東北地域内で大きな差異があった(図 1、図 2)。

まず、同じ太平洋岸東北地方にある下守屋、仁井田、そして南杉田村は、天明以前に人口減少が始まり、回復しないまま 1820 年前後をボトムとしてやっと人口回復がスタートする。ただし下守屋村は天保の飢饉の影響を受け 1836-38 年に再び人口が急減する。ただしそのあとの回復は勢いがある。一方、村山地方の山家、中山口、下山口村は、18 世紀中ごろあたりから人口増加がはじまり、特に天保の飢饉時の一時的急減が確認されるものの、幕末まで人口増加が著しい。著しい人口増加という点では、二本松地方の在郷町と似通っている。郡山においては天明、天保期の一時的な人口急減以外、史料の残存する 1729 年から幕末まで、人口増加が続いていた。貴重な 17 世紀の史料がある中山口村と南杉田村の変化は二つの地域の特徴を示しているようである。どちらも 17 世紀後半は 300-350 人程度で人口は安定していた。

ところが、1720 年あたりから南杉田村の人口が減少しはじめ、そのまま安定し、やがて増加を迎えた中山口村との乖離がはじまる。幕末を迎えた中山口村は、17 世紀後半中盤の人口規模から 40%増大し、もう一方の南杉田村は、幕末に人口増加がスタートしたものの 17

世紀のレベルまで回復しなかった。

図 1　村山地方・二本松地方農村の人口推移：1678－1870 年

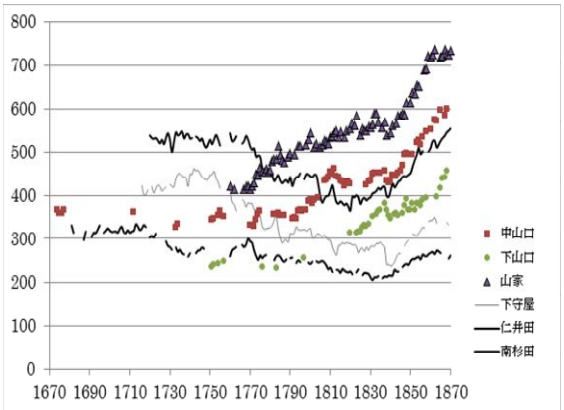
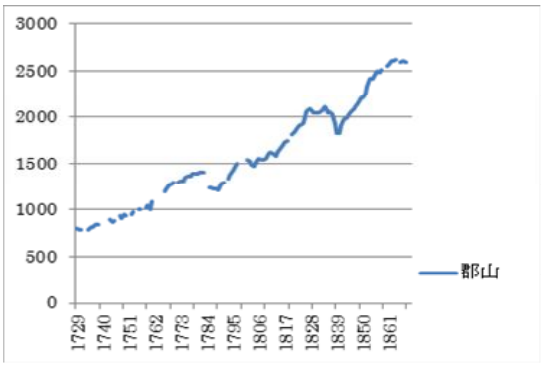


図 2　郡山上町の人口推移：1729-1870 年



これらの人口変動は農村の場合、死亡率よりも、出生率の違いによって生じているようである。死亡率はどの村も 24-26‰でそれほど変わらないが、出生率では二本松農村の低い出生率（南杉田 24.5‰、下守屋 21.3‰、仁井田 23.6‰）と、村山地方の高い出生率（山家 37.1‰、中山口 32.1‰）との差が際立っている。一方、郡山上町は在郷町であるが、死亡率（26.6‰）、出生率（28.8‰）ともに二本松農村より高いが、村山地方の農村よりも低い。郡山の人口増加の要因は、近隣のみならず、遠く越後などからの人口流入も含めた社会増加によるものであった。

(b)世帯規模の推移

人口の推移の要因となった出生率の高さは世帯規模にも影響した。表 1 では年代別に世帯規模をみているが、どの年代をとっても、山家村、中山口村の世帯規模の方が二本松地方の町村よりも大きい。しかし、天保の飢饉をのりこえ、人口回復・増加が進んだ 1840 年以降にはどの町村も 5 人以上に増えているところは興味深い。

表 1　世帯規模の推移

	山家	中山口	南杉田	下守屋・仁井田	郡山
1678-1714	--	--	4.5	--	--
1716-1759	--	5.5	4.2	4.3	3.9
1760-1799	5.1	4.9	4.4	4.0	4.7
1800-1839	5.3	5.0	4.2	4.2	5.3
1840-1870	5.7	5.9	5.1	5.3	5.9

表 2 は連携研究者の平井が、仁井田村と中山口村を対象に行った世帯規模の分析（2011）をその他の地域と時期にも適用したものである。都市化の進んでいる郡山だけでなく、二本松地方の農村で単身世帯が多いことが特徴である。連携研究者の岡田は、奥州街道に位置する村々の激しい移動を指摘する。これは世帯の存続期間にも表れている。岡田の算出によると全期間で世帯が 1-5 年しか継続しない割合は、南杉田村で 23.0%、下守屋・仁井田村で 23.9%である。同様の計算を施した平井によると、この割合は中山口村ではわずか 4.4%であった。

このような違いがあるものの、人口変動や世帯規模の変化に伴って、その分布にも 1840 年以降に著しい変化がみられる。1840-70 年に限定してみると、二本松地方でも単身世帯や 2-3 人世帯が少なくなり、4-6 人、7-8 人世帯が増加した。

表 2　世帯規模の分布：1678-1870 年

世帯人数	山家	中山口	南杉田	下守屋・仁井田	郡山
1	5.0	6.1	8.2	11.1	9.6
2-3	17.6	20.1	32.7	28.9	28.3
4-6	49.1	46.2	42.3	44.1	35.9
7-8	18.5	17.2	9.9	10.9	13.0
9+	9.9	10.4	6.8	4.9	13.1

さらに、対象地域の経済指標として、持高別に世帯規模を比較したのが表 3 である。持高の規模は各農村によって異なるが、ここでは、無高（水呑）と中間層、上層という大きなくくりで示した。この分析は村山地方の経済指標変数の作成がまだ進行中のために二本松地方のみを対象としている。世帯規模の違いはあるが、村であっても、町であっても、無高層で小さく、中間層、そしてさらに上層になるほど世帯規模は大きくなる。全体の平均では村とそれほど変わらなかった郡山の上層世帯の規模の大きさは特筆すべきである。農村的特徴と宿場町の特徴を持った郡山

の一面を示している。ただし、持高によって判明する社会経済的地位は高持層に限られるため、質的調査からも明らかな、高持、水呑、店借という身分についても分析を進めた。

表 3　持高別世帯規模

	南杉田	下守屋･仁井田	郡山
無高層	3.2	2.5	4.4
中間層	4.3	3.9	5.9
上層	6.2	5.4	9.8

（c）多変量解析を用いた地域差比較

多変量解析には、家族間のリンクやイベントヒストリー分析用の変数の構築など、フラットファイルの作成が要求される。村山地方データのフラットファイル化は進行中である。二本松地方については、結婚、再婚、死亡などの人口学的イベントと分析を進め、その成果は、国内他地域との比較（黒須 2012）、国際比較(Lundh, Kurosu, et al 2014)として出版した。また国際比較モデルを応用した形で、下守屋・仁井田村についての移動分析(Tsuya and Kurosu 2013)や養子と出生を比較した構造要因の分析(Kurosu 2011)を刊行した。さらに農村土地貸借と人口の関係のモデル化を図り、仁井田村を対象に分析を試みた(Arimoto and Kurosu 2015)。下守屋村、南杉田村については詳細な土地貸借の情報のデジタル化を完了することができた。仁井田村での分析モデルを適用することによって、今後二本松地方村間の土地所有と人口という新たな課題に取り組むことができる。

多変量解析のもう一つの進展は在郷町と周辺農村の比較である(Kurosu and Takahashi 2013)。結婚分析結果から、在郷町と周辺農村では、男女ともに初婚年齢(SMAM)や生涯未婚率に大きな差があり、明らかな都市（町）型と農村型の結婚パターンが確認された。再婚の生命表分析からも 35 歳未満男女の再婚パターンの違いが明らかとなった。しかし、不連続時間イベントヒストリー分析モデルを用いた分析では、地域の経済状況や、世帯の経済状況と同居家族が、初婚・再婚タイミングに与える影響に多くの共通点が確認された。例えば、世帯の社会経済的地位が高いほど男女ともに初婚確率は高くなる。特に男性においては嫁取り婚で、女性においては婿取り婚で、つまりどちらも継承者の初婚においてその影響が強い。また同居する両親の存在は、両親がいない場合と比べて男女ともに初婚確率を高めるが、この影響は特に跡取り娘と息子において顕著であった。

また死亡や移動イベントにおいては、飢饉年が農民、町民に与えた影響に違いがあった。さらに町場のなかでも、その社会経済的地位によって死亡リスクの構造に違いがあることが明らかになった。例えば、周辺農村の死亡リスクを高めた天明の飢饉の影響は郡山全体では見られなかったものの、社会経済階層別にみると水呑層ではその影響が明らかになった(表 4)。また天保の飢饉は店借層において、死亡リスクを平年の 4.6 倍に押し上げていた。また持高層で、持高が大きいほど死亡リスクが減少する点は周辺農村の結果と同様である。さらに米価の変動は短期経済的ストレスを示し、米価の上昇は農村の死亡リスクへ大きな影響をもたらす。しかし、郡山においては飢饉の影響に吸い取られる形で、符号は正であるが、統計的に有意ではなかった。

表 4　死亡確率のイベントヒストリー分析：郡山上町 1729-1870 年

	高持層	水呑層	店借層
天明飢饉	0.63	2.72**	0.66
天保飢饉	1.81**	1.72**	4.57**
米価	1.13	1.27	1.11
世帯持高	0.99**	--	--

注：オッズ比　**p <0.01　年齢、世帯規模、年代をコントロールしている

本研究がとったイベントヒストリー分析を長期ミクロデータに適用するというアプローチは Lundh, Kurosu, et al.（2014） をはじめとする Eurasia Project が行った 5 カ国比較分析の方法である。同一のモデルを複数のコミュニティの長期ミクロデータに適用することで、文化的・制度的違いを越え、集計的なアプローチではみられない、死亡、出生、結婚タイミングの様々な共通点と相違点を明らかにするという斬新なアプローチである。その点で、本研究は新しい比較分析のアプローチを日本国内のデータに応用する可能性と意義を提示することができたといえよう。在郷町と農村との比較で判明した直系家族システムのロジックをめぐる町村間の共通性、また各町村内における社会経済的地位における相違性、これらは記述的な統計からは決してわからないメカニズムである。今後、さらにデータ構築を進めた村山地方を含めた町村で同様のアプローチを展開していくことが課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 22 件）

Hao Dong, Cameron Campbell, Satomi Kurosu, Wenshan Yang, James Z. Lee 2015 (forthcoming) "New Sources for Comparative Social Science: Historical Population Panel Data From East Asia" *Demography* 52(3): 1061-1088. (査読有)

Arimoto, Yutaka and Satomi Kurosu　2015 "Land and Labor Reallocation in Pre-modern Japan: A Case of a Northeastern Village in

1720–1870" *IDE Discussion Paper Series* 519.

Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2013 "Social Class and Migration in Two Northeastern Villages 1716-1870." *The History of the Family*: 18(4): 434-455 (**査読有**)
DOI:10.1080/1081602X.2013.815126

Kurosu, Satomi 2013 "Adoption and Family Reproduction in Early Modern Japan." **『経済研究』**64(1)**：**1-12　(**一橋大学経済研究所編**)　**岩波書店**　(**査読有**)

Satomi Kurosu 2011 Divorce in Early Modern Japan: Household and Individual Life Course in Northeastern Villages, 1716-1870.　*Journal of Family History* 36(2): 118-141. (**査読有**)

岡田あおい 2013**「宗門改帳からみる農民社会の『家』」『生をつなぐ家』風響社**　pp.113-132.

髙橋　美由紀 2012　**「在郷町の結婚と再婚」黒須里美編著『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』麗澤大学出版会**　pp.119-139**.**

平井晶子 2011**「東北日本における家の歴史人口学的分析**: **一八・一九世紀の人口変動に着目して」　笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版**　pp.215-232.

〔学会発表〕（計　29 件）

Kurosu, Satomi, Christer Lundh and Marco Breschi "Remarriage in Pre-industrial Eurasia: a Comparative Perspective"　Social Science History Association, 2014/11/6-9 Toronto, Canada.

Kurosu, Satomi and Miyuki Takahashi "Marriage and Households in Early Modern Northeastern Japan: Rural-Urban Similarity and Diversity" XXVII IUSSP International Population Conference, 2013/8/26-31, Bussan, Korea.

黒須里美「東北農村における家族の再生産と養子」日本人口学会第 64 **回大会**　2012 **年** 6 **月** 2-3 **日**　**東京大学**

〔図書〕（計　2 件）

Lundh, Christer, Satomi Kurosu, et al. 2014 *Similarity in Difference: Marriage in Europe and Asia, 1700-1900.* Cambridge, MA: The MIT Press. (**査読有**)

黒須里美　**（編）**2012　**『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』麗澤大学出版会**

６．研究組織

(1)**研究代表者**

黒須　里美（KUROSU, Satomi）
麗澤大学・外国部学部・教授
研究者番号：20225296

(2)**研究分担者**

なし

(3)**連携研究者**

岡田　あおい（OKADA, Aoi）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：50246005

髙橋　美由紀（TAKAHASHI, Miyuki）
立正大学・経済学部・准教授
研究者番号：50361845

平井　晶子（HIRAI, Shoko）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：30464259